

# 寝床屋の無料配布

・ 会所騒動 ― とある湊にて ―  
……

3

ぐおー、がー、と大きなイビキが座敷中に響く。酒を浴びるほど呑んだのに、ちつとも眠くない。寧ろ、目が冴えているほどだ。

……やるなら今しかない。

いやでも。どうしよう。

散々悩んでも、まだ腹を括れなかった。隣で今宵の相方が、小さく寝息を吐いて向こう側へ寝返りを打った。

いや。そうだ。やるなら今しかない。

気を抜けばすぐに挫けてしまいそうな気持ちを奮い立たせ、そろりと物音を立てないように身を起こした。

変わらず、耳障りなイビキが響いている。

酒器や膳、皿や箸が転がり、男と女の体が入り乱れた座敷をそろそろと進む。そして、上座で女を両脇に抱え、あけつびろげに裸を晒している男の元へ近づく。

そつと頭の所へ回ると、ご丁寧に手首へ結びつけた風呂敷へ手を伸ばす。包みの風呂敷ごと取ろうと思ったが、結び目が投げ出された腕の下に入っていて、これでは起こさずに解くことなど出来ない。

やはりダメか。

一瞬諦めかける。

——お前みたいな情けねえ男に、何かできると思ったか？

不意に、目の前の男にかけられた言葉が甦る。

水夫たちの待遇の悪さを訴えた。

自分たちの寝る場所もないほどに荷物を積む。自分たちでは手に負えないほどの量と重さだ。

出航してしまえば、満足に水も食料もない中で、朝から晩まで働かされる。船の上での食事は、船頭を筆頭に水夫頭やそれに追唱する水夫たちが先だ。彼らが食べ終わつた後には、飯など殆ど残っていない。

風待ちで湊へ入っても、船を降りられるのは船頭以下一部だけだ。水夫が降りてはいけないという訳ではない。降りたくても降りられないのだ。

航海の途中で給金は出ない取り決めだ。ならば、自分の金のある程度持ち込めば、好きに降りることができる。

だが、一日中働かされた上に、毎晩行われるイカサマ賭博で全て巻き上げられてしまふ。うまく博打から逃げても、降りたら知らない間に出航されてしまつたり、艇に乗れずに置いていかれたりして、仕事を放棄したとみなされ罰金を課され、僅かな給金も貰えなくなる。

もちろん、給金の額はきちんと決まっている。だが、航海途中での事故や病気の時のために何某かが引かれ、船が難船した時のために何某かが引かれ、加えて万が一の時のために貯めておく方が良いと言われて幾許かを収めさせられる。更には、水夫として雇つてくれている田佐木屋への冥加金、廻船問屋仲間としてお上へ収める冥加金、となんだかんだと理由をつけて、給金からどんどん金が減っていくのだ。

更には、仮に病気になつても、仕事を休めば仕事を放棄したと罰金を引かれた。そんなこんなで、実際に手渡される時には僅かになつてしまふ。

その僅かな持ち金では、日々食べるものを買うだけで精一杯である。

元々自分が働いていた船では、荷を買つたり売つたりした最終的な残りから、船の維持に必要な分を引いて、その残りを皆に分ける。品物の買値と売値が上手く行かなければ、手元に来る金は少なくなる。その分、給金が予め決まっているのは厚遇に思

えだが、実際にはそうではなかった。

それでも爪に火をともしようにして貯めた金も、巻き上げられていくのだからタダ働きも同然である。

尚も逆らえば、見せしめとして同じ水夫たちからのひどいイジメが待ち受けており、そこまでされればいかに高い志や硬い決意であっても、保ち続けることは難しかった。

だが。

今はどうだ。

船もない。荷も殆どが沈んだ。僅かな荷を売り払って得た金。決して口外するな、と言わんばかりに押し付けられた食べ物と酒と女。

それも自分が良いものを選った残り滓だ。

もう沢山だ。

ああ、もう沢山だ。

こんな男にいいようにされるなんて、もうごめんだ。

逃げるなら今しかない。

どうせなら、金も持っていこう。

だが、手首に巻かれた風呂敷が解けない。金は諦めるか？

そこで、はたと気づく。

風呂敷ごと持っていかなくても良いのでは？

そうだ。中身だけ貰っていけばいい。

震える手を、手首に結ばれた方ではなく、金を包んでいる方へそつと手を伸ばした。

結び目に触れた途端、かちや、と金が動いて音を立てた。ちょうど座敷中のいびき

や寝息が収まって静まり返ったところで、ひどく大きく響いた気がした。

「うーん」

船頭がむにゃむにゃと何事かを呟いて、ボリボリと剥き出しになった出っ腹を掻いた。

このまま目覚めるか？ もし見つければ、どんな目に遭わされるか判らない。

殴られ蹴られるのは日常茶飯事だった。その上大声で罵詈雑言を耳元で怒鳴り散らされる。その痛みと勢いを思い出すと、体が恐怖で竦む。喉がカラカラだ。手足が震

える。息苦しくて胸を掻き篋りたくなる。

「俺に逆らうなあ」

うへへへえ、とだらしのない笑い声を上げながら、船頭がふにやふにやと寝言を呟いた。

その言葉に、カツと頭に血が上った。

もうこれ以上、お前に良いように扱われて堪るか！ 逃げてやる！

床の間にあつた花器を取り上げる。ほっそりとした見た目に反して、なかなか重い。それを振り上げる。一瞬躊躇ったが、ぐつと唾を飲み込んで、振り下ろした。

風待ちと称して立ち寄った湊で、村の連中と組んで荷を売り払ってしまふ手筈だったのだ。

荷を空っぽにして、船を適度に壊す。

積荷は容れ物から出し、小分けにしてしまふ。それを村人があちこちへ売りに行つて、金を手にする、と言うわけだ。

船の方は、荷を丸ごと村へ売ってしまう。庄屋も、一番近い代官も、鼻葉がたつぷ



り効いているから、難破の立ち合いはあつてないようなものだった。

村人は品物が売れた値段から予め決められた金額を、売り上げから船へ払う。船はその上がりを受け取り、出発した湊へ帰る者、江戸や堺といった到着先へ報告に行く者と分かれる。

そして、途中の湊で船が沈みました、と問屋衆に報告するわけである。

だか、今回は違った。

海が荒れて、船がひっくり返ってしまったのだ。自身は水を掻き出しだり、船縁を越えてくる波や激しく突き上げてくる波に翻弄されているうちに、どうやら投げ出されたかどうかはたらしい。

咳き込んで目覚めた時には、どこぞの浜に打ち上げられていて、波に顔を洗われていた。

一体何処に居るのか判らずぼんやりしていたら、船頭が「とつとと荷を集めろ！早くしねえか！」と怒鳴りながら、嫌と言うほど殴つて来た。

こんなになつても縁が切れないのかと恨めしく思った。

荷を集めた後は、無事だったものを筵や木箱に移し替えて、宿場町までえっちらおっちらと担いで行き、全部売り払って金に変えた後、船頭が全員を引き連れ、強引に女郎屋へ上がったと言うわけだ。

上がり込んだ座敷で酒肴を持って来させると、早速一本銚子を空にした船頭は、更に宿の主人に女たちを全員呼べと横柄に言いつける。

主人は当然鼻白んでいたが、逆らっても仕方がないと思い直したのか、暫くすると座敷に女たちが集まった。

「本当にこれで全員か？」

さらにもう一本銚子を空けた船頭は、粘ついた視線でしつこく女たちを値踏みし、楼主が止めるのも構わず無遠慮に女の体を触る。女たちが嫌な顔をしているのにも関わらず、一番上玉の遊女を二人横柄に呼びつけて、両脇に座らせてやっと、一言言った。

「あとはお前らの好きにして良いぞ」

ガハハハハ、と座に下卑た笑いが轟くが、却って座敷が冷え冷えとしたようだった。「お前らも売り込まねえか。そんなんだから茶を引くんだ」

船頭が女郎たちに手を振る。だが、女たちも困惑した様子で楼主をチラチラと伺う。

楼主も困った顔で、顔見せに居並ぶ女郎たちに頷いてみせた。女たちがそれを受けて、戸惑いながら水夫たちの隣へバラバラと散っていく。

自分についたのは、白粉を真っ白に塗りたいくって口紅が真っ赤の、やたらとしないで掛かって、ベタベタしてくる女だった。飲みたくもないのに、とにかく酒を勧めてくるのに閉口して、兎に角黙って呑んでいた。

口止めなのは明らかだった。

本当なら、難破した湊で代官や庄屋などに立ち会いをしてもらって、荷物や船の状態を確認してもらわねばならない。荷が散逸しているようなら、近隣の住人に船を出してもらい、荷の回収もしなければならぬ。

船頭はそれをする前に荷を売り払ってしまった。

しかも、水夫たちを当たり前のように巻き込んで。

その口止め料が、安宿の安女郎と、お情けのような酒肴。

腹が立った。反吐が出た。

座敷は芸者も兼ねた女郎が奏でる賑やかな三味線と歌声、船頭の耳障りな笑い声が虚しく響く。長く苦しい夜は、なかなか時が過ぎるのも遅い。

チヨンチヨン、と吉原の真似事のようにやく引けの拍子木が鳴る頃に、しこたま酔っ払った船頭がとうとう女郎の着物を無体にひん剥いて、腰を振り始めた。

なんでこんなことになったんだらう。

今考えても良く判らない。

北前船の船主の家に生まれた。兄が一人いたし、自分は船に乗っているのが好きだった。だから、ゆくゆくは自分が船頭になって家を、兄たちを支えるのも良いと思っていた。

船をたくさん抱える廻船問屋ではない。

一隻しかない船に、自分たちがこれぞと見込んだ品を買って積む。そして、西廻り、東廻りと船を出して行く先々の湊で荷を売り、また荷を買って江戸や大阪まで運んだものだ。

それが、ある時呆気なく壊れた。

船が難破したのだ。

海運を営む以上、難破の危険性は常にあった。だから船の手入れや荷の積み方には

念には念を入れていた。それこそ、万事手を尽くした上で、神事は当然ながら、験担ぎに、鯛の頭かと笑われそうな呪いまで行っていたほどのものだ。それでも絶対はない。とは言え、荷を買っている以上、難破したのなら自分たちの懐が痛むだけで済む。しかし、間が悪いことに、かなり大口の荷を預かっていたのだ。滅多にしないことなのだが、どうしても頼まれて受けた荷だった。それが、全滅した。荷を預かる時に交わしたのは、万が一の場合は荷主が六割、船主が四割の責で清算すると言う内容だったが、それを書いた約束の紙も沈んでしまった。

這う這うの体で湊に戻った自分たちに、荷主が十割の責に、商売の損を補てんしろと全く約束の変わった誓約書突きつけて来た。約束が違うと言っても、では交わした控えを見せろと迫られた。

結局、船と水夫、そして家の商売を、件の荷主にまるっと売り払う羽目になった。その相手が何を隠そう、田佐木屋である。それ以降、いつまで経っても下つ端の雑用係としてこき使われている始末だ。

だが。

それも今日までだ。

寝静まった宿の廊下を足早にだが静かに歩く。他の部屋からもイビキが聞こえる。油差しも、若い衆も寝入っているようだ。

普請の古い宿の板張りの廊下は、一足歩くたびにギシギシと音が上がって、宿中に響いているように思われて、恐ろしかった。

だが、今は一刻も早く外へ出なければ。

奥向きの廊下を怖々と進むと、台所に突き当たった。片付けも済み、竈門の火も落とされたそこは、ほとんど何も見えないほど真つ暗だった。海の上の方がまだ明るく感じるほどだ。だが、台所なら勝手口があるはずだ。

怖々と進む。

足をそろそろと出して、床があるか、進行を阻むものがないか、確かめる。そして、そうっと手を伸ばして壁や水屋、竈門やまな板など足では判らないものがないか、確かめてから、一歩進む。

廊下を進んできたよりも、一層進みが遅い。遅々として進まない。夜が明けてしまふ。いや、今にも船頭が起きてしまうかもしれない。気持ちばかりが焦った。

長い時間が掛かって、やっと勝手口と思われる板戸に足が触れた。

全体をそろそろと探ると、芯張り棒がかってあった。存外硬く板戸を止めている棒を、音を立てないように気遣いながらそつと外していく。

そこまでして一歩外に出た時の解放感と言ったら。

海の上でどこにも逃げられない潮風ではない。土臭く惣後架近くの風だろうと十分に爽やかだった。思わず大声をあげて笑いながら、走り回りたいほどに。

だが、そんなことをして捕まるわけにはいかない。ともかくこの場から少しでも早く遠くへ離れなければ。

早く、早く、早く。

先行きへの不安と、一刻も早く遠くへ逃れたい焦りに足が纏れそうになりながら、小さな宿場を歩く。

町の真ん中を通り抜ける大通りではない。

宿場で暮らす人々の長屋の間を通る小道だ。暗い中にも、町外れに山並みが見える。あそこまで行けば、山の中を辿って逃げられるだろう。

何せ手形を持っていない身だ。身元を改められる関を通るのは避けたい。

「ねえ、待つて。待つてよ」

出し抜けに女の声が聞こえて、ぎくりと体が震えた。宿にいた女郎か。こんな所で見つかつてしまうなんて。

足を速める。

捕まるワケにはいかない。今更あの船頭の下になんて戻りたくない。悪事の片棒を担がされるのも、殴られ蹴られ罵られ、酷い扱いを受け続けるのもごめんた。

今や走るほどの速度で、町外れへ向かう。

「待つてよ！ ねえったら！」

悲鳴ほどの大声で女の声が追いかけてくる。

冗談ではない。そんな大声を出されては、人が起きるではないか。

逃げ出したこともバレてしまう。

振り切るように走った。懐に抱えた小判が、今更のようにカチャカチャと鳴り、走るたびに草履がザリザリと地面を噛み、足の裏をパタパタと叩く。その合間を縫うように、同じく草履の音が後ろから聞こえていたが、次第に遠くなりもう聞こえなくなつた。



このまま逃げ切るのだ。

人家も疎な田んぼの中を通り過ぎて、更に暗い森へ走り込む。勢いで少し進んで、真つ暗な森の中で足が止まった。どっちの方向に進めば良いのか、判らなくなつてしまったからだ。

だが、朝までここでじつとしているワケにもいかない。出来るだけ遠くに離れなければ。

頭では判っていた。

だが、走り続けてきた疲労と暗闇の恐怖で足が止まってしまふと、もう動かせなかつた。

きよろきよると見回してみても、繁った梢が僅かな光も遮つて、重たい闇に沈んでいくようだった。

はあ、はあ、と自分の息遣いが大きく聞こえる。

周囲が静かだからか。それとも、闇そのものが生き物のように己が閉じ込められているからなのか。

判らない。ただ恐怖だけが募ってくる。

「ねえ」

出し抜けに声がかかり、冷たいものが頬に触れた。

恐ろしさで心の臓が飛び出るかと思った。実際喉に支えていたのかもしれぬ。ひいつ、と引き攣った声しか出なかった。

「置いて行くなんて……ひどいじゃないか」

恨みがましい声が、闇の向こうから聞こえてくる。

そこで、辛うじて保っていた意地と、怒り。そして大事を仕出かすと言う緊張でギリギリに張り詰めていた糸がぶつりと切れた。

へたりと地面に頽れる。ジャリ、と着物に抱えた銭が音を立てる。

ごめんなさい、ごめんなさい、と憑かれたように呟くが、誰に謝っているのか、己でも判らない。

自分は一体何のために、どうしたかったのか。

そんなことも忘れて、ただ。

誰に。

何を仕出かしてしまったのか。

それだけが襲いかかってくるように思い出されてくる。

思い出したら、もう後は恐怖しかなかった。

また何度も、大声で怒鳴られる。何度も殴られ、蹴られ、責め立てられる。媚びても謝っても許されず、際限などないようにイジメ抜かれる。

その恐怖から、ごめんさい、と口が勝手に動く。そんな言葉を吐いても、許されたことなどないのに。それでも、言わなければ言わないで、やはり殴られるのだ。

「座り込んでないで！ 逃げるよ！」

ぱちん、と頬が挟み込まれるように叩かれる。その痛みと言葉に、ぼやけていた意識がふつと晴れたような気がした。

「え……？」

「ボケてないで！ さあ、逃げるよ！」

グッと手を掴まれて引かれた。

逃げる？

「さあ！ 立って！ 逃げるんだって！」

女の声が、腕が、己を引っ張る。

逃げるって？ 逃げられない。逃げられるはずがない。恐ろしいアレから。思い出すだけで、体から力が抜けて骨から震え出すと言うのに。

「まだ誰も気付いちやいない。でも、ここでぐずぐずしてたら、捕まっちゃう。その前に逃げるんだよ！」

逃げられる……のか？

「いいかい、今なら間に合うんだ！」

間に合う……、のだろうか？

「さあ！」

間に合うなら。今ならまだ逃げられると言うのなら。

女に引かれるまま、そろりと立ち上がって、足を踏み出す。

「で、でも……。暗くて……」

目の前には暗闇が待ち構えている。

「山育ちのアタシに任せときな。こんな暗闇、屁でもないよ」

女はそう言うど力強く手を引っ張った。

暫く山の中を女の言う通りに従って歩いていく。崖を登ったりすることはなかった

が、坂道をずいぶんと登らされて、息が切れた。そうこうする内に、徐々に森の中でも周りが見えるようになった。夜明けが近いのだろう。途端に、森が途切れた。

「さあ。尾根を越えたよ」

一面の森と連なる山々の向こうが、赤紫に染まっている。

「この後暫くはずっと山歩きになるからね」

夜明けの光の中で、やっと救い主である女の顔を初めて見た。船頭の相手をしていた女の内の一人だった。頬が腫れている。身を差し出す段になって、思わず嫌がってしまったせいでも殴られたのだ。その後の仕打ちは誰が見ても酷いものだった。だが、自分達も女たちも、船頭が恐ろしくて諫めることも止めることも出来なかった。

「あの……、その……」

見捨てた自分も同罪だろう。だが、なんと行って良いか判らなかった。

「あの男、絶対許さないから。アンタもそう思ったから、逃げたんでしょ」

女は途端に怒りに満ちた顔をして、言った。

「あんなの幾らでもあった。逆らえないって動けないのも判らないでもない。だからって怒ってなくはないけどね」

女は尾根を降りながら言う。

「……ああ。それでいい」

そうとしか言えなかった。

「それで、どこへ行くんだ？」

尋ねた自分に、女はチラリと後ろを振り返ってニヤリと笑う。

「江戸」

「は？」

思っても見なかった言葉に、きよとんとする。江戸は今回の目的地ではあった。だが、それは当然ながら雇い主である廻船問屋と、依頼主でもあり、廻船問屋を陰で仕切っている田佐木屋がいる土地でもある。そこへ自分たちが行くのは正しい選択とは思えなかった。

「アンタら、船が沈んだんだろ？」

ぎくりと体が震える。

「なん……」

「潮焼けして、鍛えた体をしてた。それに漁師ならあんな集団で来るなんてことはし

ない。あと、アイツが船頭だろう？ なんやかんや命令するのに慣れてたし、アンタらの腫れ物を触るような態度とか、おべっか使う様子を見てたら判るよ」

なかなか目端の聞く女郎である。

「それにそれだけの金を包んだ風呂敷。一昨日の夜は海の方から酷く荒れたからね。ウチも足止めを食らったお客で一杯だった」

よく見ているものだ。

「じゃあ、なんで江戸……」

「難破を装って、荷を売り捌く奴らがいるんだって」

「またも体がビクリと震えた。」

「船が難破したら、役人の立ち会いが必要だろ？ けど、中には難破してもいないのに、難破したことにして金を騙し取る船乗りがいるんだってさ。役人に袖の下を渡してる湊なら良いけど、そうじゃない湊の時は、役人の立ち会いの前に荷を幾らか売り飛ばしちまうんだって」

「なんでそんなこと……」

まさしく自分たちがやっていたことだ。それを何故この女は知っているのか。

特に今回は船が大破した。船頭はわずかに残った船を壊して、荷も全て離散したことにしようと思いついたのだ。そのために役人の立ち会いがある前に、荷を全部売り払ってしまったと言うわけだ。

「そう言うのを調べてるお人がお江戸にいるんだとさ」

ギョツとした。それは役人ではないのか。捕まってしまうのか？ 己の行く末にゾツと総毛立った。

「お役人じゃない。商人だつて言つてた」

女が笑う。

「随分前についた客でさ。閨に入つてもただ色々話をするだけの、珍しいお客だよ。廻船問屋と問屋が組んで、難破で荷を無くしてるんだつて。自分のところだけが儲かるようにね。だから、アンタとアタシは、江戸のその商人のところへ行つて、今回の話をする」

「捕まったら……」

「アタシたちの身の安全と交換に、話す。それが約束されないなら、話さない」  
女がキツパリと言う。



「逃げるにしたって、一矢報いてやりたいと思わないの？」

戸惑う己の顔を女が指差す。船頭にしこたま殴られた跡だ。そんなこと出来るのだろうか？

「それに、アタシが堪忍してやらない。だから、アンタが嫌がろうが、引きずってでも江戸へ連れていく。そして、絶対アイツに報いを受けさせてやる」

女はそう言つて、朝日の中でニヤリと笑つた。

二人が関所を通らず山を越えた頃。

「おい！ 俺の金をどこへやった！」

薄暗い女郎屋の座敷で、船頭が大声で怒鳴る。水夫と女たちは壁にへばりつくようにしてただだ怯えていた。船頭はそんな彼らを手当たり次第に胸ぐらを掴んで殴る。息を呑む音と、押し殺したような悲鳴が上がる。

「大人しくしろ！」

そんな座敷へ、宿場の同心たちが物々しい捕物の出立ちで乗り込んできた。後ろには、この宿の若い衆がそれぞれ芯張り棒やら播り粉木やらを手に控えている。

「な、なんだ……っ！」

「銭を持たずに座敷に上がった不届者はお前たちだな」

船頭に対して、ずいっと後ろから大仰に出てきた与力が重々しく尋ねる。

「ふざけるな！ 銭ならある！」

「では出してみよ」

そう言われて船頭は、うっと詰まる。手には風呂敷が結えられているが、それが包んでいたはずの中身が無くなっているのだ。

「出せぬのか？」

「持ってたんだ！ それを誰かに盗られたんだよ！」

船頭が言い訳する。

「こいつらの中の誰かが、持ってるはずだ！」

船頭は座敷の隅に固まっている水夫と女郎たちの方を指差す。

「本当か？」

「正直に言わねエと、どうなるか……」

水夫たちに尋ねる。与力の尻馬に乗るように船頭が怒鳴るのを、

「貴様は黙っておれ」

ピシリと与力がすかさず止める。

「どうだ？ お前達の誰かが銭を持っているのか？」

だが、誰もが首を振る。

「相分かった。こやつらを引っ立てい！ 女達は別の座敷へ集めよ」

与力が命令を出す。同心達が座敷に走り込んで水夫達をキリキリと縛り上げていく。本人達は疲れ切ったように、抵抗もしなかった。

「なっ！ なんで俺が！」

ただ一人船頭だけは抵抗を試みた。だが、同心の一人に十手で首の後ろを打たれて、意識を失った。

「ここまで来ても、縁は切れねエか……」

水夫の一人が、下つびきに引かれながら座敷を出ていく時に、うんざりとしたようにボソリと呟いた。

——了

#CC0240317 COMIC CITY ONLINE -240317-

# 寝床屋の無料配布

2024/03/17 刊

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: [nedocoya@gmail.com](mailto:nedocoya@gmail.com)

Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。  
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

今回も長くなってしまった……。  
昨夏に出した、会所騒動の続きとなります。  
他の所も書くと、ちゃんと内容が繋がっていく……。  
はず……。  
というわけで、頑張って続きを書いてまいりますので、  
お気が向きましたらば、ご覧くださいませ。

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが  
出てこないお話を、番頭さんとかわなをと、  
丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

## \* おねがいとおことわり \*

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

- ・ 有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。
- ・ 本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。